北海道医歌人会詠草

日々雑詠

帯広　中野　知弘

氷点下二十度ともなる寒十勝白き霞は肺腑を刺しぬ
氷雪の路行き帰る夜更かな明日は散りゆく賀状を抱き
気にかゝる程のこと書きつけしメモ失ひにけり幾度見まはす
脳症は永遠に見覚めず三十年の山河を越へて流れゆかむか
行き交はす他人には見えぬ悲しみの背嚢を負ふて歩みゐるかも

年賀状

美唄　吉村　誠治

初詣で五才の孫に手を引かれ歩みの衰へ我は知るなり
今年にて年賀の挨拶とり止めと一行多き賀状見つめる
記録的透析続ける友からの自筆の賀状に勇気貰へり
新しいき職場に移りて戸惑ひぬ賀状の数は更にふえたり
当たりたる御年玉つき年賀状今年も切手十五組なり

春の花

札幌　魚住あらた

いづくより湧きてくるやといま想ふ玄冬のこえつくづくありき
無心なるわれ九七才生ありて海山想ふ光れるまゝを
九七才われに生ありいまなりと光れるまゝの海山想ふ
己れいま九七才老い想ふ白寿の春に指示をし想ふ
粛々と死にまねかるるいまはなく春の花をしつくづく想ふ

豪華船

札幌　山口　康徳

物質の文明進めばひき換に人格さがり暗さますかも
江戸時代巾を利かせし上納金文化に背向けいまだ息づく
四十年前呱々の声あぐ新幹線北の大地に今ぞ足架く
少雪に気をもみゐたるスキー場あはれと見しや浸々の雪
にぎはしきムードに包まれフェリー発つこれわが国のほこるべき豪華船

老の特権

札幌　小国　孝徳

ベートーヴェンとどろとどろと響かせてあまぎらし降る雪を見てをり
コールマン髭蓄へしのみに恃めなき軍医なりしかはや六十年
陰を診ることなくなりて幾年か寂しと告ぐることならなくに
美しき人らの手を握る幸ひもよぼよぼとせる老の特権
猛々しき羆と闘ふ夢なりき寒夜にかくも夜具乱れをる

ヒポクラテスの嘆き

札幌　古屋　統

振込め詐欺幾つの組織あるものぞ脅迫葉書二通電話二度来る
泣き乍ら点滴ミス言ふ子の声がまことらしくも贋のようにも
妹を騙る電話の二週後に同じシナリオ姉を騙りて
死者ありて御呼びのかゝる病理医の点滴ミスはシナリオのミス
医療過誤金でもみ消す裏技をヒポクラテスは訓へ給はず